関西大学での35年

本　田　忠　雄

大相撲第48代横綱の大鵬幸喜は横綱に推挙されたとき既に、引退するときのことを考えたと述懐している。すべてに関して先の見通しが甘く、目前のことしか処理できない私は大横綱の足もとにも及ばないが、ただひたすら自分の前にあるもののみに忙殺され、気がつけば35年の年月が過ぎ去っていたように思える。本来この種の文章は過去を顧みて多少なりともセンチメンタルな、あるいはノスタルジックな感情を込めて飾り立てるほうがそれらしく見えるものである。しかし私の場合は、平凡なる教員生活を終えようとするにあたり、特別な感慨が胸中に去来するわけでもない。定年も人生の単なる通過点と思えば、なんとか無事にここまで辿り着いたことをよしとせねばならないであろうか。

生来わがままで協調性に乏しい私が母校の教壇に立てたのは奇跡に近い出来事であった。Fortuna caeca est.「幸運の女神は盲目である」とはけだし名言である。女神がたまたま私にぶつかってくれたことで今の私が存在するといっても過言ではない。しかし、私はこういった運の良さを最大限に利用して自分をアピールし、自らの痕跡を少しでもその場にとどめておこうとするタイプの人間ではなかったようだ。「詩人たちが姿を消して永い年月が過ぎ去った後に、今も彼らの作った歌が巷に流れている……」とシャルル・トレネは歌った。私は何ひとつ残してはいかないので、数年経てば、「ああ、そう言えばそんな人もいたかな」といった程度に存在感が薄れ、さらに何年かが経過すれば、完全に忘却の彼方に埋没するであろう。そのほうが私にとっては気が楽である。

在職35年の間に所属教室も仏文学科からフランス語フランス文学専修へと名称が変わり、教員数もピーク時の13名から６名になろうとしている。大学を取り巻く環境も一変した。諸行無常というか万物は流転する

のが世の常ではあるが、さらにこの先にはいったい何が待ち受けているのであろうか。願わくは、恵まれた研究条件を永年に亘って私に保障してくれた関西大学がますます発展していくことを期待してやまない。

学生時代も入れれば、人生の半分以上の期間を関西大学で過ごしたことになるが、怠惰な私に対して常に暖かく指導・激励・援助を惜しまれなかった恩師や先輩また同僚の方々に深甚なる謝意を捧げながら、かつてマッカーサー元帥が退任のスピーチで言ったと伝えられる言葉を少しもじって筆を置くこととする。

Old teachers never die; they just fade away.